

伊豆天城湯ヶ島町

久板卯之助の墓



HISAITA Unosuke 1877—1922 望月 桂画

ヒサイタ チャン

ゲンニイチャンカラアマガヤマノ
エハガキヲモライマシタ。
ウタガアリマス。

オオスギマコ

コンノオクノオクノ

オウヤマデ。

ヒサイタオヂサン

ネテイマス

オテテラムネニ

チャントオキ。

ユキヲシトネニ

ワライガホ。

カハラナイカト

キイタラバ

静カデイヨト

イヒマシタ。

湯ヶ島のみなさんへ

ここ湯ヶ島でも、久板卯之助の名を覚えている人はもうほとんどいないかもしれません。

久板卯之助は、1877（明治10）年に京都で生まれました。はじめ熱心なキリスト教徒として、のちにより直接的な社会変革をめざし、社会主義者、アナキストとしての人生を選びます。

大逆事件直後、まさしく「冬の時代」といわれる頃でした。東京に居を移した彼の姿は、それからずっと、大杉栄、伊藤野枝ら、大正期自由人の群のなかにありました。

その日本人ばなれした容貌から「キリスト」と呼ばれ、その個性溢れる生活態度と誠実な人柄から、ひろく仲間に親しまれた人物です。

彼は、関東大震災の前年、1922（大正11）年1月、伊豆半島を写生旅行します。彼は熱心な運動家であるとともに、民衆美術の実践家でもありました。

記録のある限りでいえば、20点ほどの作品を残しているといえます。現存している2点のうちの1点に「伊豆の海」（油彩）があります。青いねずみ色の冬の海と風、そこに浮かぶ一隻の小舟。それが、彼の描いた最後の作品となりました。1月21日、数十年に1回あるかないか



という寒さのなかで、彼は雪の天城山中に倒れたのです。猫越峠を歩き、修善寺へと向う途中のことでした。

絶景の見える頂きにあった彼の遺体は、湯ヶ島村の人びと数十人の肩に乗って山から降ろされました。24日、新聞報道を見た仲間が駆け付けたときには、村の人びとによって丁重に仮埋葬されていたといえます。その後、「久板卯之助君終焉の地」と刻んだ墓碑が仲間の手で建てられました。

時に久板卯之助の生死を思い起こす者にとって、村の方々の親切は、人間同士の思い遣りとして、いまでも心に温かく伝わって来ます。

その後、村の共同墓地におかれた墓碑を再び見るため、幾人もこの地を訪れています。80年間、時に途切れることはあっても、途絶えることはありませんでした。現在も、彼の墓碑、彼の最終の地を見るために、私たちはおりにふれ、湯ヶ島にやって来ています。

しかし、ここまで来ても、残念ながら墓碑の位置を確かめることのできないまま、共同墓地を後にする人もいます。半ば土に埋り、とくに夏場は草におおわれていたからでしょう。

そこでこの度、墓碑がただ埋もれてしまわないように、もし訪ねる人があれば、対面を果たすことが出来るように、村の方々にお願いし、墓碑保存のためのささやかな舗装をさせていただいた次第です。

この小さなリーフレットは、関心を寄せる少数の方にその墓碑の存在についてお知らせするとともに、久板卯之助がどのような人物であったのか、湯ヶ島のみなさんへ、またこの地を観光に訪れた方がたにお伝えすることができれば、との思いから作られたものです。

これからも、久板、そして当時の出来事に関心を持つ方が湯ヶ島を訪ねることもあるかと思えます。いまではなくとも、後の気まぐれにでも、このリーフをお読みいただけることがあれば、望外の喜びです。

2003年7月26日

久板卯之助の墓 保存会有志一同

久板卯之助

その残像から

一九二三年一月二十一日、伊豆への写生旅行中、天城山中猫越峠で凍死した久板卯之助について、いまはもう全く語る人はいない。ただ近藤憲二著「無政府主義者の回想」(一九六五年、平凡社刊)か、小松隆二著「大正自由人物語」(一九八八年、岩波書店刊)でのみ、わずかに知ることが出来るといえようか。

そこでまず二著の中から、その一部を抄出して久板を紹介したい。



……大正十一年一月二四日、大逆事件の犠牲者追悼の集会が東京で密かにもたれているところに、誰かが『時事新報』夕刊に載った、天城山猫越峠に男の凍死体、それも「年齢四十四五才にて色白く高き鼻に銀ぶちの眼鏡」の凍死体が発見されたという記事を見つけて大騒ぎになった……

その記事の報ずる風体から、集会に集まったものは、一様に「久板ではないか」という不安にかられた。久板が、絵画の道具をもつて、伊豆方面に写生に出かけたことは、仲間たちならみな知っていたからである。

急遽、岩佐作太郎、村木源次郎、それに望月桂の三人が現地に急行することになった。不安は的中した。凍死体はまぎれもなく久板であった。

一月二一日、久板は下田方面から、天城山中猫越峠を越えて、湯ヶ島方面に出ようとした。峠の麓宮ノ原をたつのは、午後三時半頃。そのとき、茶屋の老婆は「此二尺余もある新雪を踏んで峠ばかりでも登り下り四里、殊に様子を知らぬ者が今頃からでは峠に行きつかぬ内に暮れてしまう」と、出発を止めた。宮ノ原から湯が島に抜けるには猫越峠を越えるのが最短距離であるが、それでも相当の距離である。しかも、久板は宮ノ原に着くまでも長い道のりを、いくつもの難所を乗り越えてきている。

しかし尾行泣かせて知られたほど足に自信のある久板の耳には、山に詳しい老婆の親切

な忠告も届かなかった。彼は「なーに僕は雪景色が大好きです」と、雪景色に誘われるように、いかにも快活に油絵の道具などを背負って、峠に向かって歩き出した。

この日は数十年前ぶりの寒さであった。しかも今とちがって、猫越峠あたりには、雪でも降ればすぐにかき消されるほどの細い山道しかなく、よその道に迷うのはいとも簡単であった。健脚の久板も、……頂上を七、八丁越えた積雪二尺余のところ、……倒れてしまう。

翌二二日午後、山林署の役人が湯ヶ島口から峠に向かって登り始めたところ、一人の凍死体に行き当たった。それが久板の死体であった。

望月たち三人は二五日前、東京を出発。湯ヶ島に着くとまず村役場に赴き、遺留品を点検、久板にまちがいないことを確認した。……それらを受け取り、遺体が安置されている猫越峠の部落に着いたのは、もう夕方であった。すでに久板は立派な棺の中に納められていた。寝棺であった。

望月が棺を開けてみると、そこにはいつもの色白の久板がいた。眼は開けたまま、手を胸で組んでいた。死人とは思えぬ穏やかで、平和そうな表情であった。久板の死体を山から下ろすときは、村のしきたりで部落四〇余戸から戸別に一人ずつ出て、運搬から納棺まで手厚く葬るのに協力してくれたというが、この夜、火葬に付すときも村人は一夜をその

ために費やしてくれた。

大正初期の冬の時代に、多くの犠牲を払ってもしつと耐え、運動を支えた久板。ひたむきなまでに新社会に賭ける禁欲主義的な生き方は、同じようにその時代を支えた渡辺政太郎や野沢重吉らにも共通するものであった。久板の場合、縁の下力持ちとして名譽も地位も求めず、貧苦に耐えただけでなく、個性的な生き方や雪山での凍死という劇的な最期も与って、死後彼の死を悼む会合や機関紙誌の刊行があいついだ。

また『労働運動』『民衆の力』『労働者』などが久板の追悼特集を組んだ。さらに後のことになるが、吉田一らの『民衆運動』は第二巻二号（一九二五年二月）を久板と高尾平兵衛の二人の『追悼全集』として特集を刊行した。ものを書かないことで有名であった村木まで、……追悼文を書いて、『労働運動』第三次三号（一九二二年三月五日）の特集に寄せているが、それは次のように感極まる形で結ばれている。

「ああ久板君！僕はいま最後の握手をして君と別れて麓の湯が島に帰る。……月は中空に、仰げば白鎧々たる雪の猫越、伏しては脚下を走る滔々天城の流、此処幽玄なる字金山の小丘に、君は永久に眠り給へ。去らば久板君！……」

その後、猫越部落の人たちの厚意で、久板の死を悼む石碑が、現地に建てられることになった。……費用と碑文は東京から送り、村

の方で石や場所を選定することになった。

碑文は望月の担当となった。彼は絵筆を使い、「久板卯之助終焉の地」をまん中に、右に「於猫越峠 一九二一・一・二一凍死」、左に「享年四六歳」と書いた。望月らしく、また久板にふさわしく、一切の飾り気をとって、けれんみも無駄もない碑文と筆致になった。村人が選んだ墓石もそれにふさわしく、村の山か川で求めた地味な自然石であった。

碑文にも「終焉の地」とあるように、当初この碑は、久板が凍死した猫越峠の現場近くに建てられる予定であった。

……およそ五〇年後、望月の子息で和田久太郎が名付け親の明美が、碑を探しに伊豆に出かけ、その碑を発見した。場所は、山中の峠ではなく、峠を下りた部落の中の村人の墓地の一隅であった。村人でもめったに通わぬ峠では、小さな碑は、風が吹けば倒れ、雪が降れば埋もれるで、そのうち誰の目にも止まらなくなっていたであろう。……村人が最初から自分たちの墓地の中に建てたものか、それともある時点で山から移したもののか、今では確認することはできない。久板の碑が今日まで残っていたのは、あくまでも村人の厚意の賜といつてよいだろう。碑を建立したのも村人、それを自分たちの墓地に受け入れたのも村人であった。

久板は、堺や売文社との交流を除けば、一



貫した大杉たち、アナキズム系の流れに属していた。その役割としては、とくに親しかった望月や渡辺政太郎らと同様に、縁の下力持ちの任がふさわしく、けつしてリーダーになつて上から指導するようなタイプではなかった。組織に入つて、組織のいうままに動く人間でもなかった。その点では、まだ労働運動が……広範に組織化をすすめる以前の段階で、『労働青年』や『労働新聞』を刊行する大



正初期頃が、もっとも活躍の場を与えられた……といえよう。実際に、その大正初期の久板の役割は、無視するには余りに大きなものである。一方で奇人の印象を与えながら、他方で生活や行動において自らを犠牲性にしてまで新社会に賭ける純粋さは「真の革命家」の印象を周辺に与えるほどであった。

それだけに……運動が機能する段階に到達した最晩年には、彼は、……むしる絵画に傾斜したり、旅にひかれた……

晩年……もっとも打ち込んだ美術に関しては、彼は近代芸術、近代美術は民衆美術に代表されるといった先駆的認識に到達していた。そういった彼の考えをうかがわせるものとして、彼が残したノート類、黒曜会の例会や民衆芸術研究座談会で発表した芸術観が『労働者』第八号（一九三二年二月）に紹介されている。そこでは、「個性の自覚、個性の解放、之れ吾人の生活の生命、其れの表現が芸術」、「吾人の感激せる生活の表現の適当なもの、之れ吾芸術」といった主張がみられ、生活即芸

術という……民衆美術の認識がはっきりとうかがえるのである。……

★ （小松隆二「大正自由人物語」より）

……久板さんには「キリスト」のあだ名があり、同志の間ではそれで通っていた。このあだ名は、久板さんのビュリタンの性格からでもあったが、その風貌からつけられたものでもあった。面長でひろい額、くぼみ眼、鍵ツ鼻、縮れた髪と、もじやもじやとしたあごひげ、どこか日本人ばなれのした風貌だったからである。「僕をよく外人がふり返って見るぜ」と彼自身もいつていた。「西洋食食とも思うのだからよ」といつて笑ったことがある。

しかし、このキリストは旧都京都の生まれ、しかも木屋町の宿屋のぼんちだったという。お父さんは彼に商業をやらせようとしたが、彼にその気はなかった。内村鑑三やトルストイのものばかり耽読していたという。彼が、洗礼をうけたのも、そのころであると思う。彼はついに牧師を志し、父の希望を断念させて同志社の神学部へはいった。しかし生来の潔癖は、教会だとか牧師だとかの正体にふれるにつれて、かえって嫌悪を感じるようになった。間もなくこれを断念し、高畑素之、伊庭孝らの「同志社反逆組」と親交を結ぶようになり、社会主義者として第一歩をふみだすにいたったのである。……幸徳事件が勃発し

て丹波の山奥まで監視の眼が光りだしたので、とうとうそこを逃げだした。

東京へ来てからは、腐蝕彫の看板づくりや出版物の予約勧誘をしながら、堺利彦の売文社へ出入りしていた。芥川竜之介の生家の牛乳会社の牧場にいたのもそのころである（*）。その間に、トルストイアンからソシアリストへ、ソシアリストからアナーキストへの思想の発展があったのである。

久板さんとは集まりのたびに逢っていたが、久板さんのところへいったのは、彼が渡辺（政太郎）さんの「三角二階」の隣の部屋に移ってきたからである。「これが久板君の部屋だよ」渡辺さんはそういつて、隣の襖をあけた。

出かけていていなかったが、私たちはかまわず入った。

「どうだ、簡単な生活だろう」渡辺さんは私をふりかえっていつた。なるほど何も無い。机もなければ火鉢もない。ただ二、三枚の座ぶとんを重ねたうえにドテラがおいてある。

「これが久板君の全財産だからね、電車で引越してきたんだよ」

「だって、蒲団があるでしょう？」

「そんなもの持つもんか、これだけだよ」

「どうして寝るんです？」

「座ぶとんをならべてね、ドテラを着て寝んだ。うえに洋服やオーバーをおいて——」

「寒いでしょう」



久板のスケッチ

久板さんはそのころ、ある雑誌社へ勤めていた。いまと金の相場はちがうが、月給二十円といえはひどい薄給である。うち十五円を生活費に、残りで月刊『労働青年』を出していた。ある印刷屋へ頼みこんで、紙はあり合

「君——」彼はその癖である「君——」というのを冒頭にしていた。
「君——、玄米がいちばん栄養があるんだぜ」彼の炊事を見ていると、左の手の平に米を十粒ほどのせて、右手の一本の指先で一粒一粒といったぐあい、とぐである。実にのるくさい……。しかしそれが、いかにも一粒一粒に愛着をもっているかに見えた。

「憤れてるから、なんともないのだから」これには驚いた。真冬でもこの調子だといふにいたっては、さらに驚いた。そういえば、その後、彼がちょっと監獄へ入って出てきたとき、「君、監獄って暖かいところだぜ、蒲団を着て寝て汗が出た」といったのを覚えてい。……寝るときだけではない、彼の生活はすべて簡易生活を通りこしたものであった。食事といえば玄米だ。

わせのものでいいという条件で、特別やすくやつてもらっていたのである。だから『労働青年』の紙は、いい紙やザラ紙や、赤いのや青いのが混じっていた。そして二つ三つ広告をとって発送費などにあてていたのである。ちよつと誰にでもは真似のできないことだろう。この新聞は七号までつづいた。そして幾人かの有力な労働運動者をその読者のなかから生んでいる。……

その後、雑誌社をやめてから、『労働青年』での経験を生かして広告とりのようなことを職業にしていたのであるが、僕はガマ口に五十銭あると働く気にならない、といっていた。それだけの金をもっている間は生活の不安を感じなかったのである。……よく留守番を頼まれる人で、神近市子さんのところにもいたこともある。

「君——、あそこは茶碗がたくさんあっていいぜ。使ったのは水へつけておいて、三度三度新しいのを使うから、五日に一度くらい一べんに洗えばいいからな」

すべてこの調子であった。しかし、茶碗はともかく、潔癖で、手と首筋は一日に三度くらいは洗った。小さなブラッシュをいつもポケットに入れていて、ひまがあれば洋服や帽子をこすった。彼はその精神とともに、本能的に俗塵をきらったのである。

超簡易生活者であった彼は、もとより徒歩主義で、よほどのときでなければ電車に乗らなかつた。足にまかせて歩いたものである。

健脚でもあった。したがって久板さんの尾行は、彼らのあいだでは鼻つまみだった。一日じゅう歩かれるのもご難だが、そのうえ、食事をするときがない。久板さんが一ぜん飯屋へはいつている間は、そとで見はつていなければならぬ。結局すきを見て大急ぎでかきこむか、ポケットにパンでも入れていて歩きながら食べなければならぬのである。駒込署の一尾行は、疲労と不規則な食事からきた胃腸病が原因で死んだ。それ以来、彼らの間では、久板さんの尾行を、「決死隊」といつていた。

ある日、新参者が彼の尾行をいつかつた。ちようどその日は、久板さんは郷里へ帰る日で、行李をかついてまず本郷曙町（そこに私どものいた労働運動社があったのである）を出て、それから小石川春日町、神田神保町とあちこちへ立ち寄りながら芝へ出た。

「これはまく気だな……」新米先生ひとり考えた。「ちと荷物をもちましようか……」

これは、ひとつには……、荷物をもっていればまかせないという、彼ら一流の戦術でもあったのである。

「気の毒だね」

そこはキリストである。感謝はしたが、足の方は容赦がない。身軽になった彼はますます歩く。とうとう渋谷まで歩き、それからやはり徒歩で、夕方すぎようやく東京駅にきて汽車に乗った。……

しかし、いかに徒歩主義者でも、もちろん電車にも乗った。それどころか、金のないと

きには、ときに妙な薩摩守もやった。こそこそやるのではない、堂々と降りるのである。車掌がとがめると、いま切符を渡したじやないか、という。受け取らないという、「いま君に渡したじやないか」という。相手にほんとうに渡したと信じさせるほどの声だ。そしてそれは、たいがい成功した。

「君——、そんなときにはね、自分でもほんとうに渡したと信じていなければ駄目だぜ」
彼はそんなことにも精神主義者であった。

しかしこのキリストは、たいへんな一刻者であった。彼は自分のあてがわれた仕事にたいして、かれこれ指図されるのを最もきらった。何事も久板式にやらなければ気がすまないのである。彼が東京へ出てまもないころ、実業之世界社の会計に雇われていたことがある。「実業之世界」の社長は諸君ご存じの野依秀市氏である。これまた何事もあつかましく野依式にやらなければ気のすまぬ人である。ある日、久板さんは野依の言葉と態度に腹を立てた。仕事のやり方に口を出したのである。彼は黙って表へ出て、ポケットに入っていた金庫の鍵をボンと宮城の豪へ投げこみ、社へは二度と顔を出さなかった。

また、あのおとなしいキリストが、ときに猛烈な熱狂漢に化することがあった。大正八年ごろのことでもあったるか、彼が郷里の京都へ帰っていたとき、労働総同盟の前身友愛会の演説会があつて傍聴に行った。会長鈴木文

治が壇上に現れて、労資強調的な演説をはじめた。すると彼は血相をかえて立ちあがつた。「やめろ、やめろ！ そんな馬鹿なことがあるか！」

鈴木を労働者の神様のように思っていた友愛会の猛者連が、たちまち彼のまわりをとりまき、腕をねじあげ、外へつれ出そうとしたが、屈しない。

「馬鹿！ やめろ、やめろ！」

一人だからたまらない。とうとう外へほうり出されたが、彼はいつまでも怒鳴っていた。

この一本気は、よその集まりだけではなかった。(仲間の「北風会」の集会ではいつも熱心な議論がたたかわされた。目前の実際問題について、われら如何なる態度をとるべきかの焦眉の問題をひっさげての論戦であり、この集まりで練りに練ったものを、あすの何事かにぶっつけんがためのものであったから、みんなも真剣だった。いつかの北風会の集まりのときだ。その日は、たしか国際労働者会議に関する問題であつたと思うのだが、猛烈な議論がたたかわされていた。集まったものが期せずして両派にわかれ、口角泡をとばしていたのである。久板さんは、あごひげをなでながら黙々と聞いていたが、そのうち一方の議論をきくにたえなくなつたのである。やにわに怒鳴つた。

「違う！ 違う！ 違う！」

まあも少しきけ、といつても承知しない。

「違う、違う！ それが革命家のいうこと

か！」

あのおとなしい人が拳をあげて怒鳴り散らすのである。これには誰も手がつかなかった。彼はこういうときに、僕の意見はこうだというふうに、諄々と説くようなことはしなかった。そういうことは下手、ただ感情を爆発させるだけであつた。しかし彼の感情はいつも正しかった。……

(近藤憲二「一無政府主義者の回想」より)

(*) 芥川がその頃のことを「僕はこのヒサイタさんに社会主義の信条を教えて貰った。それは幸か不幸か僕の血肉にしみ入らなかつたが、日露戦役中の非戦論者に悪意を持たなかつたのは、確かにヒサイタさんの影響だつた」と書いている。

最後に久板の略年譜をかいておく。

一八七七年、京都木屋町の旅館の息子として生まれ、同志社大学神学部に入ったが中退、その頃絵を学ぶ。大正初年上京して社会主義運動に身を投じ、一九一五年雑誌「労働青年」を刊行。一九一八年には、大杉栄、和田久太郎と共に「労働新聞」を出し、「北風会」に所属して「労働運動」「労働者」「黒曜会」の同人であつた。その純真無欲の人格が同志たちみんなに親愛された。生涯独身の童貞であつた。四六歳没。

(M・K)

墓への道について

▲戦後で、まだ望月桂さんがお元気の頃、ある日、久板や和田久のお墓がどうなっているか、しきりに気にかけておられた。それを承けて、久板の墓を改めて発見されたのが、ご子息の明美さんで、その後明美さんから頂いた手紙は、次のような一章があったのを忘れられない。

「私が自らの手で土をかきわけて掘り出したその時の感動は、今もって忘れ難い一瞬の思い出であります。その墓は急傾斜の勾配にあつて、土のくずれるままに陥没していました。」

そのときから又、十数年たった。二〇〇一年、ふと思ひ出して数人で墓地を訪ねたが、どうしても、遂に所在がわからなかった。その後情報などが寄せられた結果、昨秋数人で再訪、ようやく見出したお墓は夏草に蔽われつつ、やはり半ばは土中に埋もれていた。

▲そこで数人の有志発起による「保存会」は、はじめからの趣旨として、久板の墓はできるだけ現状を改変せず、土くずれなどでの埋没をふせぐ程度の改修にし、当初からの面影を残すことをまず旨とすることとした。

引用した文章にあるように、一九二二（大正一一）年当時にも猫越集落の方々には手厚い埋葬への格別のご厚意をうけた。それについて今回も町当局及び猫越集落の方々から好意ある許諾を頂いたことを、更に改めて心から感謝申し上げます。

▲ここでお墓への道について書

いておく。

伊豆半島を狩野川は南北に流れるが、その水源が天城湯ヶ島町の猫越川と木谷川である。国道四一四号線で狩野川を遡上南行して、湯ヶ島温泉に入りそこで猫越川に出合う。さらに水抜きという集落先で川は持越川と猫越川に岐れる。分岐して左へ数百メートル行くと善合野という地名の金山を背景とする丘陵墓地がみえる。

入口は松の造林と戦死者の墓で、傾斜の段々の中ほど左端はずに久板の墓は立っている。一九五八年の狩野川台風で裏山



水抜橋を渡り徒歩数分、墓地への入口（上）。手前の道に入る。右手に丘陵墓地が見えて来る（中）。斜面にたぐさんの石塔が建っている。墓地の左端、舗装された坂を登る（下）。中程まで来ると、道端、左脇にあるのが久板の墓

が崩れ多くの墓が倒れたが、その後現在のよう改修されたという。

（M・K）

※裏表紙の童謡は、久板の仲間・村木源次郎が、天城の宿でつくったもの。滅多にものを書かなかつた彼は、数編の童謡を残している。これは、大杉栄・伊藤野枝の長女魔子に宛てた絵葉書に書かれたもの。「労働運動」第三号（一九二二年一月二十五日）に掲載された。

★

久板卯之助の墓

伊豆 天城 湯ヶ島町

製作…久板卯之助の墓 保存会有志
発行…二〇〇三年九月一七日
千四一八—〇〇二—

静岡県富士宮市杉田二五一
ふもとの家 ユースホステル内
アナキズム文献センター 気付
久板卯之助の墓 保存会

（代表 望月明美）